様式１１：「川づくり団体」部門

河川基金助成事業

「地域から流域全体へ！
治水利水を学ぶ機会の創出と人材育成」

助成番号：２０２３－６１１２－０１１

びわたん
代表：北村　美香

2023 年度

様式８

1.川づくり団体部門　　[概要版報告書]

助成番号	助成事業名	所属・助成事業者氏名
2023-6112-011	地域から流域全体へ！ 治水利水を学ぶ機会の創出と人材育成	びわたん　北村美香

助成事業の要旨

活動の目的

これまでに作成した教材やネットワークを活用し、琵琶湖淀川水系における治水利水、自然や文化を現地で学ぶ機会を提供し、河川を通じた地域学習を起点に水系全体への興味関心を促す。現地見学や河川の学習活動を、地域住民や河川管理者、研究者と一緒に学生が主体となって立案、実施することで、次世代を担う人材育成も目的とする。流域治水を考えていくきっかけとして、水系全体を自ら実感できる活動をおこなう。

事業テーマ	河川や流域への理解を深める活動

〔実施内容〕

本事業では、①現地見学や体験型学習イベントを開催し、琵琶湖から大阪湾までのつながりを知る取り組みを、ツールを用いて学生と協働で実施。②参加者間などの交流を目指し、関係者も含めたネットワークを構築の２点を目的に取り組んだ。

学習イベント開催は、「漁と生き物・食」をテーマに水系の下流域・大阪湾を学ぶ機会として、8 月 28 日に 20 名の参加で岸和田漁港およびきしわだ自然資料館にて開催。琵琶湖・上流域を学ぶ機会として、9 月 30 日に 20 名の参加で瀬田町漁協および堅田漁協等にて開催。中流域を学ぶ機会として、12 月 16 日に 19 名の参加で高槻市の芥川および高槻市立自然博物館で開催した。実施については滋賀県立大学や龍谷大学の学生にも協力してもらい、参加者とのコミュニケーションの充実を図った。また、プログラム企画・実施については琵琶湖博物館、高槻市立自然博物館、きしわだ自然資料館に現地見学等について助言いただくことが出来た。

〔成　果〕

水系と関わってきた先人の経験、郷土料理などを地域の歴史の一つとして知ることは、参加者にとって大変有意義な時間になったと考えている。具体的な体験活動と思考が一体化できたこと。また、実際に漁に出ている漁師の方や資料館・博物館の学芸員の方とのコミュニケーションを通じた学びが有効であった。生き物に触れる経験や現場の方とのふれあい、子どもをはじめとする参加者同士のコミュニケーションに勝るものはなく、それを学生を含むスタッフでサポートや指導で支援できたことは大きな成果だったと考えている。離れた地域同士のつながりやかかわりについての感想やコメントをくれた参加者も多かった。

〔今後の展望〕

子どもたち対象としていたものの、年齢や経験値のばらつきからメインのターゲットがぼやけてしまった。座学の時間が長くなりがちで、子どもたちの興味関心に沿った体験活動ばかりではなかったことが反省点である。もっと参加者自身の気づきに重点を置き、事業目的の達成に向けてプログラムのブラッシュアップをおこなう必要がある。今回いただいた意見や課題を再検討し、水系に関心を持ってもらうきっかけづくりを追及しつつ、活動の定着化をおこなっていきたい。

※ポイントとなる事項に適宜アンダーラインを引いてください

様式９

２.川づくり団体部門　　[自己評価シート]

助成番号	助成事業名	所属・助成事業者氏名
2023-6112-011	地域から流域全体へ！ 治水利水を学ぶ機会の創出と人材育成	びわたん　北村美香

助成事業実施成果の自己評価

〔計画の妥当性〕

河川での活動で、治水利水をテーマにするものは少ない。実施事例の少ない分野に地域特性をふまえて取り組み、総合的な学習の機会創造を目指した。双方をつなぐ河川については、これまでに作成した治水利水について学ぶ学習ツールがあるため、各テーマの事前事後学習の機会を提供できるため、イベント参加以外の時間も活用した広がりは独自の活動であると言える。なかなか訪問する機会のない水系の端を端から参加者を募り、同じ参加者が一連の流れとして現地で体験をすることは、流域全体を感じる上で必要不可欠であった。これらの活動を支える人材育成として、企画段階から学生に参画してもらう計画は、今後の活動の継続を視野に入れると妥当であったと考えている。

〔当初目標の達成度〕

広い水系の中で住んでいる地域外の人と接する機会は少なく、河川について話すことは無い。そのような状況で共通のテーマを設定し、現地へ足を運んで先人の経験や知恵、地域の文化や歴史のひとつとして知ることは、他者と河川について話すきっかけになった。本事業への参加をきっかけに、参加者同士、特に子どもたちが生き物や河川環境の事を話している様子をよく見かけた。また、漁業関係者や学芸員、河川管理者とも実際に話せてことは大きな成果だったと言える。このことからも、共通の話題を持つことで、治水利水について話す機会を促すという当初の目標は達成できたと考えている。

住民と河川管理者が、今後の河川のあり方について意見交換ができる関係構築へとつなげるにはまだ時間はかかるが、このような機会を継続していくことでさらなる人材育成や連携となり、河川整備や流域治水が地域づくりの一つであることを伝えていきたい。

〔助成事業の効果〕

これまでの活動は、治水利水のそれぞれの取り組みについて「知ってもらう」ことを目標に、地域学習にも活用してもらえるような学習ツール作成に取り組んできた。実施地域の小学校などで教材として活用してもらい、ゲストティーチャーとしても声をかけてもらえるようになってきた。

今年度は、事業実施によりさらに活動の周知を得ることができ、その範囲も琵琶湖南部と岸和田、高槻の芥川近く以外にも大和川流域の方からも問い合わせと参加があった。プログラムも改善したことで、関わってもらえる団体や施設なども増やすことができた。少しずつであるが地域で受け入れてもらえている実感はある。今後は、これまで３地域で取り組んでいたテーマをさらに他の地域へと連動させ、流域全体に広げて「つなげてもらうこと」へと発展させていきたい。

〔河川管理者等との連携状況〕

代表の北村は、現職の博物館学芸員または研究員としても籍を持ち、河川管理者や行政、地域の他団体とのコミュニケーションが日常的に取れる環境にあるため、これまでのネットワークを活用しての取り組みができた。また、これまでもお世話になっている滋賀県流域政策局の皆さんには引き続きご協力していただき、プログラムの企画や実施についてのアドバイスや調整、連携先の紹介などをしていただいた。また、水資源機構の方には、プログラム内容と学習ツールとのつながりについて助言いただくこともできた。各地域の拠点となる琵琶湖博物館、高槻市立自然博物館、きしわだ自然資料館には、現地見学等コーディネートや当日の参加者への対応などで尽力いただいた。
滋賀県立大学や龍谷大学の学生との共同活動も継続できたこともあり、大変充実した活動だった。

〔キーワード〕

治水利水、体験学習、河川環境／文化、琵琶湖淀川水系のつながり

１章　活動目的

本事業は、これまでに作成した教材や積み重ねてきたネットワークや実績、構成メンバーの経験値などを活用し、居住地域だけではなく琵琶湖淀川水系における治水利水、自然や文化を現地で学ぶ機会を提供し、河川を通じた地域学習を起点に水系全体への興味関心を促す取り組みをおこなった。河川での活動で、治水利水をテーマにするものは少ない。このような実施事例の少ない分野を取り上げ、地域特性をふまえて取り組みになるよう企画し、治水利水の総合的な学習の機会創造を目指した。具体的には「水と人との関わり」をテーマに、①琵琶湖から大阪湾までの水系としてのつながりを知る学習機会を、現地見学や体験型学習を学生や地域住民、関係団体等と協働で企画・実施する。②参加者間などの交流を促し、関係者も含めたネットワークを構築する。以上２点を大きな目的として取り組んだ。

まず、①の学習機会を3回設定し、水系の両端である岸和田（大阪湾）と琵琶湖（南部）の2カ所で参加募集をおこない、それぞれで「漁と生き物・食」をテーマとした現地での見学と体験、座学やワークショップを実施した。間をつないでいる川調べとしては、淀川の支流である高槻市内を流れる芥川を中心に現地見学と座学を実施した。

次に、②のネットワーク構築は、現地見学や河川の学習活動を、地域住民や河川管理者、研究者と一緒に学生が主体となって立案、実施することで、次世代を担う人材育成も目的とした。企画・運営に主体的に関わることで、事業の継続とさらなる発展のための人材育成を初めから意識して両立することで、流域治水を考えていくきっかけづくりをより多く支援し、水系全体を実感できる活動を各自がおこなえるようになることも想定している。これらの活動を支える人材育成は、活動の継続をする上では急務である。流域治水を学ぶ学生たちとお互いの知識や経験を共有しながら活動し、本事業の目的を伝え、実現することを目指した。

２章　実施計画

本事業では、河川と地域とのかかわりを起点に、関心の持ちやすい小テーマを設定し、参加者それぞれが学べ、比較も出来るものの実施を目指した。昨年度の試行から得られた課題の改善を中心に、テーマ設定とプログラム構成を再検討することから始めた。大テーマとしては昨年度同様「水と人との関わり」とし、参加者の日常生活にも関わりが深く、参加による経験を自分事にしやすいと考えられる「漁」「生き物」「食」の3つを体験と学べるようなプログラム構成にすることとした。今年度はもう一歩踏み込み、幅広い生態系の中でも水系に生息している貝類（特に二枚貝）に注目することで、より比較をしやすい環境を作ることにした。

活動別の企画時のポイントとしては、①学習の機会創出では、昨年度の実施の際に情報を詰め込みすぎたことが課題であった。そこで琵琶湖博物館での座学と展示見学から、堅田漁港での漁港見学と漁師さんからのお話、二枚貝等の貝殻観察へ変更し、より視点を絞り各地域の特色を感じやすく比較もしやすいものにした。企画の段階から学生や博物館ボランティアに意見等を伺い、多くの視点の中で事業計画が立てられたのは、大変有意義で活動の幅も広がったと考えている。また、開催日の設定や当日の実施スケジュールについて、学校教員の方や地域で活動されている子育てサークルさんに相談し、屋外での活動であること。他の行事などとの兼ね合いを考慮して、実施日を岸和田での活動を8月末、琵琶湖での活動を9月末に。芥川での活動は、川の利用などについての観察も兼ねているため、雑草が枯れて観察しやすい12月半ばと設定した。琵琶湖淀川水系のつながりや各地の違いを感じてもらうために、それぞれに生息する生物について学び、それを生業としている漁業について体験および観察などを重ねることで共通点や違いを見出すことを目指した。琵琶湖と海をつなぐものとしては「治水利水」をテーマに、芥川を歩きながら河川利用の状況やそこで生息する生き物についての観察をすることができた。

また、本事業の中では大切なテーマではあるが、助成外の活動として「食」について知る、経験すること継続して設定した。日常の暮らしの中でも「食」は最も身近であり、大切なことである。地域文化を知る中

では忘れてはならないことでもあるため、現地での昼食時間を活用して、各地域の伝統食や地場の食材料（魚を中心）で作ったお弁当を参加者の自己負担で用意し、味わいながら休憩時間も学びのひとつとした。

次に②では、事業準備などを重ねる中で関係者間のネットワーク構築や参加者との交流から関係性構築は達成することができた。今年度は参加者同士の関係性構築もスムーズに進んだ。しかし、事業参加者の方が学習成果を発表する機会も想定していたが、学校行事との兼ね合いで日程調整がうまくいかず、外部への成果発表はスタッフがすることになったのは残念であった。

２．１　活動状況

本事業の参加者は、岸和田市内および琵琶湖周辺の小学生とその保護者を対象として各20名ずつ募集し、合計40名での実施を計画した。参加者がそれぞれ活動参加で得た学びを流域全体へと広げ、流域治水へと興味関心をつなげていけるように連続講座とし、原則3回とも参加できる親子を対象として募集していた。参加者募集のチラシを作成し、関係個所での配布をおこなった。また、岸和田側での募集は、協力館であるきしわだ自然資料館が担当し、市報への募集掲載、館のホームページでも募集を募った。琵琶湖での募集はびわたんが担当し、日ごろからワークショップなどの開催を告知しているSNSを使って募集をおこなった。当日1回のみどうしてもと依頼があった場合は、状況を見て参加可能にした回もある。8月28日にきしわだ自然資料館および岸和田港で開催した「チヌの海調べ」では20名が参加。9月30日に琵琶湖博物館および瀬田漁協や琵琶湖で開催した「におの海調べ」では20名が参加。12月16日に高槻市立自然博物館および芥川で開催した「間をつなぐ川調べ」では19名が参加の開催することができた。事業計画および実施については、河川管理者および近隣の博物館学芸員、研究機関等の協力を得ることもできた。広報周知の時間が少なかったこともあり、参加者が少なめだったのは残念であった。

また、屋外での活動のため、事業補助として岸和田と琵琶湖での開催時には、補助スタッフを配置した。また双方が離れているため、遠方の開催地へ自力での参加が困難な参加者も想定された。そのため、遠方実施の際はマイクロバスを手配して、誰もが同じような負担で参加できる環境づくりにも配慮した。運営に関しては、大学生やきしわだ自然資料館のボランティアの方が中心となり、安全管理なども含めて関わってもらった。

8月28日「チヌの海調べ」

滋賀から参加組はJR石山駅に集合し、マイクロバスにて岸和田へ向かった。バスの中では、参加者同士の自己紹介を兼ねて参加動機や好きな生き物や調べたいことなどをお互いに紹介した。また、これまでに作成した学習ツール紙芝居（砂防探訪、天井川ができるまで、頑張れ水門）を紹介することができた。

写真1　岸和田漁港

写真２　参加者集合写真

写真３　漁港見学（漁船の説明）

写真４　漁港見学（漁の種類の説明）

写真５　ヨリカス観察１

写真６　ヨリカス観察２

写真７　ヨリカス観察３

写真８　ヨリカス観察４

岸和田漁港で岸和田からの参加者と合流し、本事業についてのオリエンテーションとスタッフ紹介ののち、午前中は漁港見学と底引き網漁でのヨリカス観察体験を実施した。まず、大阪で最大の水揚げ量を誇る漁港の案内とそれぞれの漁で使っている船の紹介をしていただいた。その後で前日に水上げされた底引き網漁のヨリカス（出荷する魚をより分けた後のもの）を提供していただき、どのような生き物がいるかをまずは参

加者自身が触って観察した。さまざまな生き物を観察することで、底引き網漁の漁場環境が分かること。水深や季節、水温によってとれるものが違うことなどを漁師さんから教えてもらい、参加者は熱心にメモと取ったり写真を撮ったりしていた。それぞれの生き物については、きしわだ自然資料館の学芸員の方や駆けつけてくれた海洋生物の研究者の方、近隣の貝塚市遊学館の学芸員の方にも解説してもらった。

漁港での見学と体験のあとは、漁港隣で開催されているマルシェにて岸和田の海の幸を見学して昼食を選び、資料館へ移動していただくことが出来た。先ほど漁港で観察した生き物などについての感想を話しながらの昼食は、それぞれの感想や生き物の生息環境にも話が発展し、海のそばで栄えた岸和田の生業や食文化についても思いをめぐらす時間になった。

午後は資料館で大阪湾の生き物などについてお話を聞き、館内見学をしながら各自が調べる時間を取った。その後さらに関心を深めてもらえるように、ちりめんじゃこに混ざる微小生物探しのワークショップ「ちりめんモンスターをさがせ！」を参加者に体験してもらい、知識と体験を振り返る機会になっているようであった。

岸和田での活動は、午前中の気温が上がりきらない時間帯を屋外で過ごし、午後は館内で過ごすなどの配慮はして、体調管理と体験と情報の整理の流れを作る工夫を今年度は取った。参加者からは「漁港で見た生き物の事を、ゆっくり調べたりお話を聞けて良かった。」「たくさん初めて見るものがあって楽しかった。」「他のところの事も早く知りたい」などの感想を得ることができた。

写真９　マルシェ風景

写真１０　資料館での座学

写真１１　チリモンワークショップ

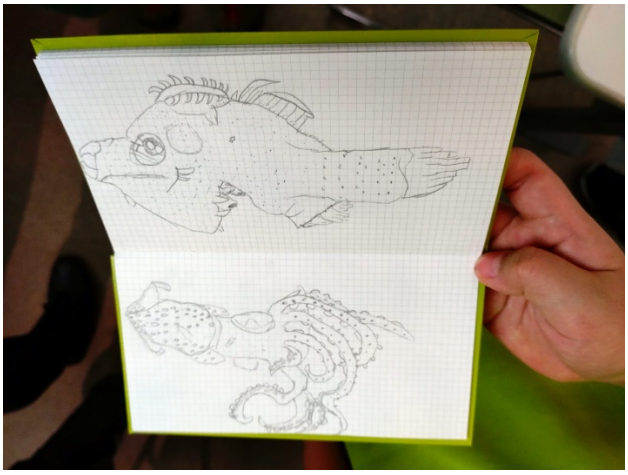


写真１２　参加者のメモより

9月30日「にほの湖調べ」

第2回目は琵琶湖での開催のため、滋賀からの参加者は現地集合で。岸和田からの参加者は資料館に集合してマイクロバスで滋賀県瀬田へ向かった。車内では、前回の岸和田漁港での活動の振り返りなどをおこない、どのような活動をしたのかなど思い出してもらう時間となった。琵琶湖での活動は、瀬田町漁港でのシジミ掻き漁体験から始めた。岸和田とは違い瀬田町漁港は小規模なので、シジミ掻き漁体験で漁船へ乗船する道中に、それぞれの漁師さんから漁港内や周辺の街などを案内してもらってから乗り込んだ。昔ながらの竹竿に貝かきの籠を取りつめた漁具を使って漁協前の漁場（瀬田川と琵琶湖の境界近く）まで船に乗り、漁師さんの指導の下に瀬田シジミの漁を体験した。各漁船で体験をしながら、漁師さんの体験談や瀬田川や琵琶湖の話、シジミや川エビの料理の話などにそれぞれが盛り上がった。

写真１３　シジミ掻き漁１

写真１４　シジミ掻き２

写真１６　漁風景

写真１７　セタシジミ

漁体験のあとは、漁協の2階で漁師さんよりシジミやシジミかき漁について。また、瀬田川・琵琶湖の環境についてなどのお話をしていただいた。実際に船に乗り、自分でシジミを採ったことで、漁の大変さや環境問題についてなどを考えることができた。セタシジミやその他の生き物などについても質問が次々と出たり、食事で食べた時の経験や家族で海に潮干狩りに行った時との違いなどを参加者同士で話しされていた様子を頻繁に見かけるようにもなり、参加者同士の関係ができてきていることも感じた。

シジミかき漁のあとは北へ移動し、琵琶湖大橋の側の道の駅にて昼食を取った。昨年度の湖魚料理お弁当の評判が良かったので、今年度も同じお店にお願いしてビワマスや川エビなど滋賀の食材を使ったお弁当を子どもたちでも食べやすい調理方法でお弁当を作ってもらった。

昼食の後は、琵琶湖最大の漁港である堅田漁港へ移動し、漁港見学と加工場などについてのお話を漁師さんと琵琶湖博物館の研究員の方から現場を散策しながらお聞きした。午前中の瀬田町漁港では昔ながらの人力でのシジミ掻き漁を体験したが、堅田漁港では現在の漁船でマンガンを挽いての貝挽き漁をしている。それぞれの船や方法などのお話を現場で聞くことで、比較などもしやすくなった。現在は貝挽き漁が大幅に減ってきてしまっているため、加工場などの縮小の現状を見学しながら聞き、加工後の貝殻をまとめてあるところで、貝殻観察をおこなった。

堅田漁港見学の後は琵琶湖大橋の道の駅に戻り、今日の振り返りと体験や観察した二枚貝や漁のお話を研究員の方からお聞きした。質疑応答の時間も多めに取り、参加者同士の交流の時間も確保できたため、それぞれがメモを取ったり情報交換ができたりしたことは良かった。この回は移動時間がどうしても取られるので、できるだけ座学だけの時間を少なくし、現地見学をしながらお話を聞いてもらうように配慮した。結果として、現地や参加者のニーズに合った対応となったので、本事業のような目的での活動には向いているのが実感できた。すべてのプログラムを終了した後は、道の駅で休憩し、琵琶湖の幸などを買物される参加者が多かった。せっかく足を延ばしてもらった場所で、お勉強ばかりではなく地域を楽しみ時間も必要だということを改めて感じた。

写真１７　瀬田漁港見学

写真１８　漁港風景

写真１９　貝殻観察

写真２０　貝殻の山の上で集合写真

12月16日「あいだをつなぐ川調べ」

本事業の最終回として、湖と海をつなぐ川について調べる回を設けた。淀川での開催も考えたが、規模の大きさと河川まで近づける距離が遠いことから、支流の芥川で開催することにした。昨年度は川と人との関わりなどにも触れることをねらいに史跡などを活用した川歩きをメインにしたが、子どもたちには少し難しかったのが反省点であった。そこで今年度は川歩きを少なくし、芥川中流部で川にも降りやすい高槻市立自然博物館を拠点に、活動することに変更した。まず館内で芥川の紹介などを学芸員の方からお話してもらい、その後で芥川へ出ては河川管理や生き物に配慮した魚道ついての説明や生き物の生息環境などについて現場でしてもらった。何気なく見ていた川の景色の中にもさまざまな取り組みがされていること。その環境で共存している生き物についての観察もすることができた。冬の川では水鳥の観察ができるため、前の2カ所とは違う視点での生き物観察を時間を多めに取ってゆっくり過ごすこともできた。昼食後は、館内で展示や標本などを活用し、観察した生き物や川についての振り返りをした後、それぞれが印象に残った生き物などをシートに記入してもらい、各自の気づきをみんなで共有した。

写真２１　芥川のお話

写真２２　芥川で魚道などの説明を聞く

写真２３　川歩き

写真２４　館内で振り返り

今年度の活動としては今回が最後となるが、参加者同士で連絡先を交換したり、次の開催などについての問い合わせがあったりと嬉しい出来事もあった。協力館へについての質問や、自分たちで河川の生き物を調べるときに必要な道具や方法などについての質問も多くあった。「琵琶湖から海まで、一度くだって見てみたい。もっと新しい発見がたくさんできそう」などの意見も得られて、事業の目標達成の手ごたえを感じることが出来た。

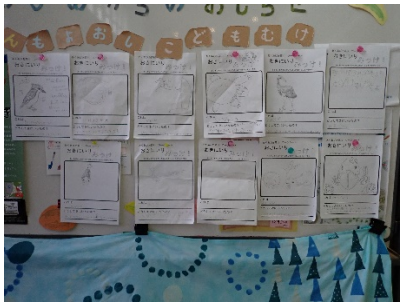


写真２５　はっけんシート全体

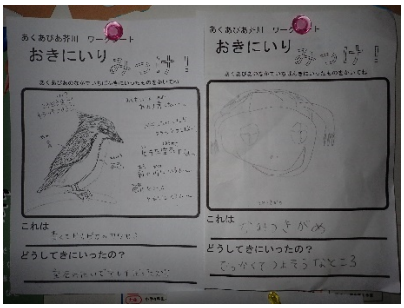


写真２６　はっけんシート１

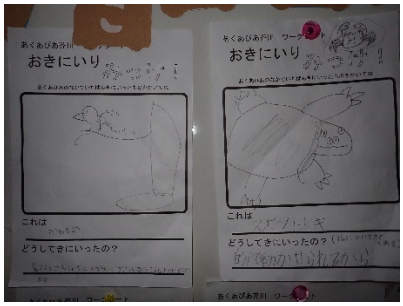


写真２７　はっけんシート２

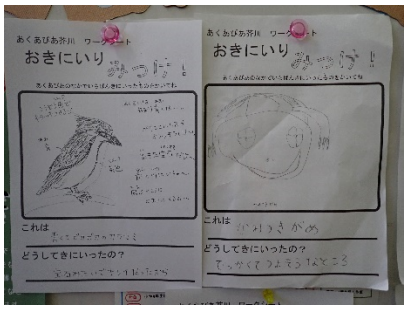


写真２８　はっけんシート３

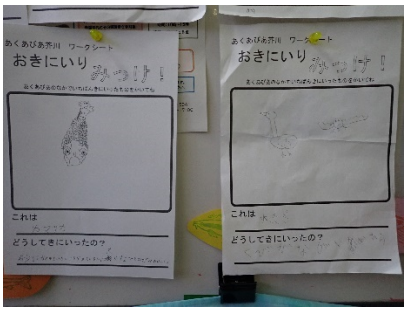


写真２９　はっけんシート４

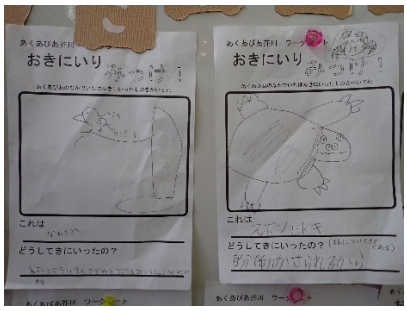


写真３０　はっけんシート５

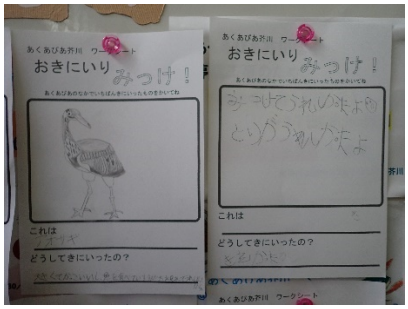


写真３１　はっけんしーと６

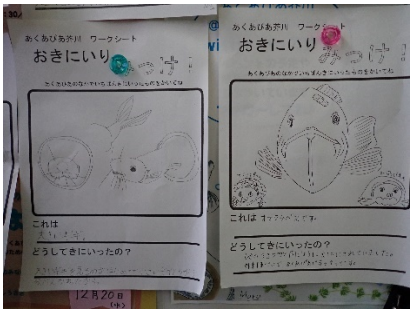


写真３２　はっけんシート７

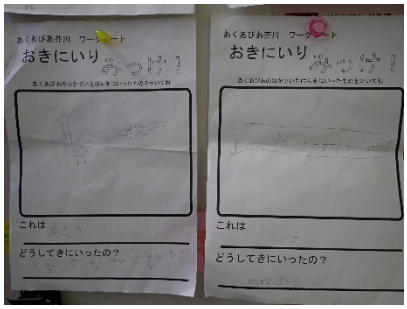


写真３３　はっけんシート８

２．２　実施スケジュール

2023年　5月30日　第1回全体打ち合わせ
7月10日　岸和田プログラム打合せ、下見
8月28日　岸和田プログラム実施
9月　1日　琵琶湖プログラム打合せ、下見
9月30日　琵琶湖プログラム実施
10月12日　実施振り返り、芥川プログラム打合せ
12月15日　芥川プログラム下見
12月16日　芥川プログラム実施
2023年　3月10日　大阪湾フォーラムにてポスター発表
3月25日　第2回全体打合せと反省会
3月31日　事業終了

３章　活動成果

本事業は、治水利水のそれぞれの取り組みについて「知ってもらう」ことを目標に取り組んできた。水系と関わってきた先人の経験、郷土料理などを地域の歴史の一つとして知ることは、参加者にとって大変有意義な時間になったと考えている。それぞれの地域の特性はもちろんのこと、他の地域特性も同時に知ることができたため、具体的な体験活動と思考との一体化が実現できた。それにより、当初計画していたような地域比較にまで参加者の思考を誘うことができたのではないかと考えている。

また、実際に漁に出ている漁師の方や資料館・博物館の学芸員の方とのコミュニケーションを通じた学びが有効であった。生き物に触れる経験や現場の方とのふれあい、子どもをはじめとする参加者同士のコミュニケーションに勝るものはなく、それを学生を含むスタッフでサポートや指導で支援できたことは大きな成果だったと考えている。離れた地域同士のつながりやかかわりについての感想やコメントをくれた参加者も多かった。参加者同士のつながりが予想以上に発展したことは、嬉しい誤算であったと考えている。事業実施側が細かく準備するより、参加者同士で自由に交流する時間を確保する方が、よほど効果があることも観念殿活動から再認識できた。

流域治水を学ぶ学生やそれぞれの博物館や地域などで活動するボランティアや研究者と協働することで、伝えることの重要性や分かりやすさを活動の中に反映してもらえるのではないだろうか。このコミュニケーション機会の創出を学生や多くの方と共に作ることで、人材育成や新たな活動の展開を目指し、河川整備や流域治水が地域づくりの一つであることを伝えていくために、事業継続によるつながりを学ぶ機会の創造を続けていきたい。

４章　今後への展望

総合的な川づくりを目指すために、【治水・利水事業】について学ぶことは、防災意識等の形成に向けても有効であると考えている。市民活動団体レベルでは、実施ケースが少ない部分であるため、手薄になりがちで取り組みにくいが必要な部分に向き合うことの重要性を改めて実感した。また、水系全体を視野に入れた取り組みは、広範囲であることの他に取り扱うテーマの多様さや、関わる人や団体の多さも当然ながらある。限られた範囲での活動以上にそれぞれの調整や情報共有は複雑になっていくが、その過程でお互いを理解し、信頼関係を築いていくことができることも本事業に取り組む中で実感できた。

また、子どもたち対象としていたものの、年齢や経験値のばらつきからメインのターゲットがぼやけてしまった。座学の時間が長くなりがちで、子どもたちの興味関心に沿った体験活動ばかりではなかったことが反省点である。もっと参加者自身の気づきに重点を置き、事業目的の達成に向けてプログラムのブラッシュアップをおこなう必要がある。今回いただいた意見や課題を再検討し、水系に関心を持ってもらうきっかけづくりを追及しつつ、活動の定着化をおこなっていきたい。

今後は、本事業でつながったネットワークや、参加者からいただいた意見などを元に、さらに活躍できる場づくりが課題である。今回の取り組みは、街づくり、地域づくりのスタートをしたに過ぎない。地域との連携については、少しずつではあるが構築でき始めたと思っている。今後は活動の場を学生たちと共にさらに拡大し、連携の先にある【協働】を目指して地域の資源を活用できるようなシステムや関係性の構築へとつなげていきたいと考えている

連続講座（全3回）

ちぬの海と におの湖 あいだをつなぐ川しらべ

ちぬ (クロダイ) の海・大阪湾と、にお (カイツブリ) の湖・琵琶湖。そして両者をつなぐ淀川。これらの地域の特徴や産業を知り、そこで暮らす生き物を観察したり漁を体験したりしませんか。大人だけの参加も歓迎します。

8/27日

第1回

ちぬの海を学ぶ
岸和田の漁港たんけんとチリメンモンスターさがし

[場所: 大阪府岸和田市] 岸和田漁港・きしわだ自然資料館

9/30土

第2回

におの湖を学ぶ
瀬田漁港でセタシジミ漁体験と琵琶湖の恵みを学ぶ

[場所: 滋賀県大津市] 瀬田漁港 ほか近隣施設

12月 中頃

第3回

淀川ってどんな川?
あくあぴあ芥川の観察会

[場所: 大阪府高槻市] 芥川・高槻市自然博物館 あくあぴあ芥川

受講対象や定員、申込方法などは裏面をご覧ください。

【主　催】 びわたん・きしわだ自然資料館
【問合せ】 きしわだ自然資料館「連続講座」係　Tel: 072-423-8100　E-mail: shizen@city.kishiwada.osaka.jp

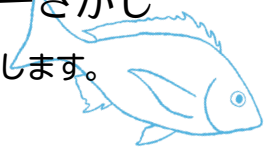
連続講座（全3回）

ちぬの海と におの湖 あいだをつなぐ川しらべ

第1回 8/27日

10:00～16:00
[場所: 大阪府岸和田市]
岸和田漁港
きしわだ自然資料館

ちぬの海を学ぶ
岸和田の漁港たんけんとチリメンモンスターさがし



底引き網漁の話を聞き、漁港探検やヨリカスの観察などをします。

【担当】きしわだ自然資料館 風間
Tel: 072-423-8100　E-mail: shizen@city.kishiwada.osaka.jp

第2回 9/30土

10:00～16:00
[場所: 滋賀県大津市]
瀬田漁港
ほか近隣施設

におの湖を学ぶ
瀬田漁港でセタシジミ漁体験と琵琶湖の恵みを学ぶ

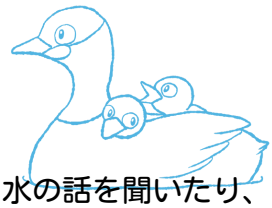
瀬田のシジミかき漁の話を聞いたり、シジミかき漁の体験、周辺施設の見学などをします。

【担当】結creation 北村
Tel: 090-0000-0000　E-mail: info.yuicreation@gmail.com

第3回 12月 中頃

13:00～15:00
[場所: 大阪府高槻市]
芥川
高槻市自然博物館
あくあぴあ芥川

淀川ってどんな川?
あくあぴあ芥川の観察会



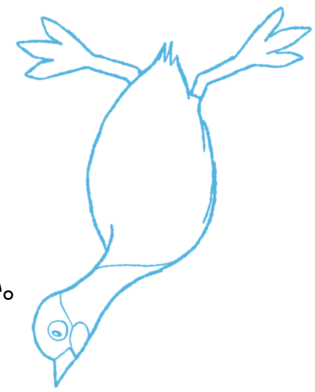
淀川の支流・芥川を歩きながら治水や利水の話を聞いたり、生き物の観察をします。

【担当】結creation 北村
Tel: 090-0000-0000　E-mail: info.yuicreation@gmail.com

対　象　小学生以上 (小学生は保護者同伴。幼児同伴不可)

費　用　3000円 (全3回分 資料代ほか)
※ 岸和田および滋賀出発で遠方にはバスが出ます。

定　員　岸和田 / 滋賀 それぞれ20人 (抽選)



申込方法　電子メールにて
参加者全員の住所・氏名・年齢か学年・電話番号を記入してください。

申込締め切り　8/21 (月)

申込・問合せ先　〒596-0072 大阪府岸和田市堺町6-5 きしわだ自然資料館「連続講座」係
Tel: 072-423-8100
岸和田出発: E-mail: shizen@city.kishiwada.osaka.jp
滋賀出発:　E-mail: info.yuicreation@gmail.com

この事業は2023年度 河川基金の助成を受けています。

河川基金

様式１２

3.川づくり団体部門

[実施箇所位置図]

助成番号	助成事業名	所属・助成事業者氏名
2023-6112-011	地域から流域全体へ！ 治水利水を学ぶ機会の創出と人材育成	びわたん　北村美香

	主な実施箇所	滋賀県大津市　瀬田および堅田、大阪府岸和田市　漁港周辺 大阪府高槻市　芥川周辺

助成事業の主な実施箇所

滋賀での実施場所

滋賀県大津市　瀬田および堅田

大阪での実施場所

大阪府岸和田市　漁港周辺

河川基金ロゴ等表示状況写真

遠景	近景